

8

シニアの
学びの意欲を
高める

河村賢治氏

立教大学法学部 教授
立教セカンドステージ大学
学長補佐



7ページで述べた通り、寿命の延伸や少子高齢化による労働力人口の減少などさまざまな社会的背景のなかで、中高年層は働き続けること、社会に貢献し続けることを求められ、それに伴い学び直しのニーズも高まっている。シニア層の意識を学びに振り向け、学び続けさせるには何が求められるのだろうか。

立教セカンドステージ大学は、50歳以上のシニア層の学びを支える教



育機関として2008年に開学した。「当時、団塊の世代の一斉退職が社会課題とされていました。この方たちの退職後、社会がどのような受け皿をつくっていくかを模索していた時期でした。そこで、シニア層に対して質の高い人文的教養教育と多面的な学びの場を提供し、社会と大学のネットワークの輪を一層広げることは、これからの時代における大学の社会的責務だと考えたことが設立の背景です」と説

明するのは、立教セカンドステージ大学学長補佐の河村賢治氏だ。

多様な選択肢があってこそ 学びの意欲は喚起される

立教セカンドステージ大学では、“自由な市民”として一人ひとりが自分なりのセカンドステージの生き方をデザインできるようにサポートすることを重視している。「自由な市民に必要なことは、幅広い教養です。利害関係や固定観念にとらわれず、自分のことだけでなく広く社会や世界に思いを馳せて、多くの人々が尊厳を持って生きられる社会を目指し、その実現に向けて活動・貢献する人々だと考えています」(河村氏)

カリキュラムは、「学問の世界A・B」と「ゼミナール・修了論文」を主軸とした必修科目と、3つの選択科目群「エイジング社会の教養科目群」「コミュニティデザインとビジネス科目群」「セカンドステージ設計科目群」から成る。「『コミュニティデザインとビジネス科目』では社会・地域貢献のためのソーシャルビジネスの理論や実践を、『セカンドステージ設計科目』では、シニアの健康や心理学、死生観などを扱います。また、リベラル・アーツ教育に強みを持つ立教大学の全学共通科目も履修できます」(河村氏)

「シニア向けに特化したカリキュラムです」と、立教セカンドステージ大学教務委員長の栗田和明氏は説明する。「健康、経済、社会とのかかわり方についてプラクティカルに知識を得ても

らう授業もあれば、実際面からは離れて、生/死、幸福/不幸、平等/不平等という人生の根本について、歴史や哲学、文学を紐解いて再考してもらう授業もあります。その学びを社会に還元してもらうことは重要な目的です。同時に受講生が人生の半ばで、21世紀のこの場で生きている意味や世界に多様な人がいることの意味を考える機会となれば、こんなにうれしいことはありません」

仕事に直結する専門知識を獲得したい、あるいはこれまで経験してきた専門領域を深めたいならば、大学院や専門学校など多様な学びの場が既にある。「セカンドステージ大学はそうではなくて、これまでとは別のステージに進みたい、別の角度で社会を見たい、という人を対象としています。多様な選択肢があってこそ、多くの人の学びの意欲が喚起されると思います」(河村氏)

修了生が現在の受講生に 刺激を与える循環

では、実際にどのような人が、どのような動機で学んでいるのか。「今セカンドステージにいる人だけでなく、セカンドステージの準備をしたいという人にも開かれた場です。そのため、動機もさまざまです。それまでとは異なるステージで社会や地域、人々に貢献するために学びたいという人もいますが、すべての人がポジティブな理由で入学するわけではなく、たとえば配偶者を失った、体調不良に陥った、



栗田和明氏

立教大学名誉教授
立教セカンドステージ大学
教務委員長



仕事を失ったなど、好んで人生の転換点に立ったわけではない人もいます。全員が同じスタート地点ではない、同じ歩調で進むのではない、というところもセカンドステージならではの思いです」(栗田氏)

セカンドステージ大学の修了生たちは、東日本大震災の復興支援、パラリンピックの支援、シニアの再チャレンジ支援など、多くの領域で活躍している。「シニア世代の生き方についてディスカッションする機会が多くあり、それが自らの生き方、社会でのありようを考えることにつながっている」と、栗田氏は言う。「NPOを設立し、活躍する修了生などが、学びをどのように生かしているのか、どのように社会とのつながりを持っているのかについて授業のなかで話す機会を設けています。修了生は1000名以上、同窓会・同期会でのネットワークも非常に活発で、修了生が現在の受講生に刺激を与える循環ができ上がっています」(栗田氏)